

ありのままに愛することができるか

日比野佑香

一 はじめに

本稿の目的は、イヴ・コゾフスキー・セジウィックの『クロ
ーゼットの認識論』^①に収められた、ヘンリー・ジェイムズ
「密林の獣」^②についての読解を整理し、彼女の議論が何をどの
ように抑圧することで成立しているのかを探ることにある。

「ホモセクシュアル・パニク」という概念を用いて「密林の
獣」を論じたセジウィックの議論の重要性は、当該小説を、同
性愛のカミング・アウトの物語としても、あるいはまた、単な
るその失敗の物語としても読まないことにある。この政治的に
も文学批評的にも精妙な読解は、実のところ、どのような視点

から語られたものであろうか。これは、クイア批評の立ち位置
の問題であると同時に、「密林の獣」そのもののなかにも書き
込まれている問題でもある。この問題を考えることは、批評史
的には、フェミニズム批評の発展型の一としてうまれたクイア
批評が、男性同性愛とフェミニズムの関係をどのように考える
かという問題にもつながるはずである。

二 『男同士の絆』と「ホモソーシャルな欲望」

セジウィックが「密林の獣」の主題であるとした「ホモセク
シュアル・パニク」とは、彼女によれば、「ゲイ・パッシャ

ーに対する有罪判決を防いであり判決を軽くしたりするために使われる弁護戦術」(Sedgwick 1990, [19/30]) として裁判において用いられる、いわば、ゲイをバッシングすることを正当化するための抗弁の一であり、もともとは「望んでもいないのに性的に接近させられたことによっておそらく引き起こされた、病的な心理状態」([19/30])を指し示す(「以前はどちらかといえばあまり知られておらず、ほとんど診断例もない」)精神医学上の分類の名称」([20/32])である。セジウィックは、以上のような「ホモセクシュアル・パニック」という精神医学/司法用語を、自身のクィア批評/クィア理論の要となる用語として援用しているのだが、セジウィックの文脈において「ホモセクシュアル・パニック」とは、具体的にどのような事柄を表す用語として用いられているのだろうか。手始めに、セジウィックの文脈における「ホモセクシュアル・パニック」の意味を確認するため、彼女が理論化した「ホモソーシャルな欲望」あるいは「ホモソーシャル連続体」という概念についての要点をまとめることから始めたい。

「ホモソーシャル連続体」という概念は、セジウィックが『男同士の絆』³において提唱した、「ホモソーシャルな絆とホモセクシュアルな絆とが潜在的に切れ目のない連続体を形成している」という仮説」に基づいた男同士の関係構造のことである。こ

の男同士の関係構造は、一見「同性間の社会的な絆」([1/2])と認められるのだが、つねにホモセクシュアルと呼ばれ排除される可能性にさらされた関係構造である。セジウィックは、そのような「ホモソーシャル連続体」における男性の欲望に「ホモソーシャルな欲望」という名称を与え、ヘテロノーマティブな父権社会にあつては、女性と交際する男性、あるいは、「女の交換」⁴における「男」の位置にある男性は、実のところ、自身を異性愛男性であるとアイデンティファイしている者と、自身のセクシュアリティに無自覚な者の二者に分類され、後者に相当する者が女性と交際することあるいは女性と婚姻関係を結ぶことに、ミソジニーとホモフォビアという二つの意味を裏と表の関係として読みこんだ。

ミソジニーとは、自身のセクシュアリティに無自覚な男性にとつての女性との交際/結婚が、父権社会を維持し再強化するという目的のために、「女」をパートナーではなく贈与の対象あるいは財と見なし、それを「男たちの間」で交換することであり、それゆえそれは女性への愛情の偽装に過ぎないことを意味するのだが、そのようなミソジニーとは実のところ、ホモフォビアをその裏面として併せ持っている。つまり、セジウィックの特筆すべき慧眼によれば、自身のセクシュアリティに無自覚な男性は、自分自身を同性愛者ではない者として説明するた

めのいわば踏み絵として女性への愛情を偽装しているのであり、彼らはそのような踏み絵を踏むことによって自身が同性愛者であると見なされる可能性を周到に排除したうえで、同性間における「社会的な」連帯の中で男性としての「正しい」地位や権利を獲得しているのだ。換言すれば、ジラルルのな「欲望の三角形」^⑤において、「三角形の二辺が男であるとき、そこに女を媒介として用いつつ排除する、ホモソーシャルな権力が働」^⑥いており、そのような「ノーマルな」権力の磁場としてのホモソーシャルな絆における「女」と「男性同性愛」とは、いわばジュディス・バトラーのいうところの「構成的外部」^⑦として、排除されるために指定されているのである。

またセジウィックは、アラン・ブレイが『同性愛の社会史——イギリス・ルネサンス』^⑧において明らかにした、一部の同性愛者たちが恣意的かつ断続的に法的襲撃の対象とされたという歴史的な事実、「ホモソーシャルな欲望」の起源があると推定している。セジウィックの洞察力に富んだ理論の核心は、近代以降の西洋社会において、一部の同性愛者たちに対する無差別な弾圧が断続的に繰り返されたことによって、「自身がホモフォビックな『無差別』攻撃をうけるかどうか、同性愛者にならなく」(Sedgwick, 1985, [88/135]) のはもちろんのこと、「自分は同性愛者ではない」(他の男性との絆が同性愛的では

ない)という確信を誰ひとりとして持ちえない」(188-89/135)、括弧内セジウィック)という状況がくりだされ、そのような偶発的な処罰の可能性が内面化されることによって、自身のセクシュアリティに無自覚な男性は、自らを異性愛男性として服従化し主体化していったという部分にある。

以上のような文脈上において「ホモセクシュアル・パニック」とは、ヘテロノーマティヴな父権社会において、自身のセクシュアリティに無自覚な男性が、「男性の男性に対する欲望がどんなに中心的なものであるか——そしてその欲望の否認がどんなに中心的なものであるか——」(Sedgwick, 1990, [211/302]) ということに直面し、もしかしたら自分は同性愛者かもしれないという恐怖や、あるいは、他人から同性愛者とみなされるかもしれないという恐怖を抱くことで、強迫的にヘテロノーマティヴな父権社会に同化していくことである。

三 「密林の獣」の読解をめぐる

「密林の獣」を一言で表すならば、それは「何十年にもわたって親しい関係にある男女についての話」(Sedgwick, 1990, [195/281]) である。その一組の男女は、長きにわたり親交を温めていたのにもかかわらず、結婚せず、最終的に病を患った女

性は男性を遺して死んでしまう。大橋洋一の「解題」^⑨によれば、セジウィック以前「密林の獣」は、親しい男女における「相手の女性の愛を感じ取れず、結ばれる決定的な瞬間も取り逃がし、女性が死んでからその愛にきづくという、優柔不断な男の物語」（大橋、321）として受容されてきた。つまり、男性主人公のジョン・マーチャーは女性主人公メイ・パートラムを「欲望すべきだ、た」(Sedgwick, 1990, [211/302] 強調セジウィック)とするような読みがなされてきたのである。

対してセジウィックは、そのような伝統的な読みは、マーチャーは異性愛者でしかありえないという想定に基づいた「ストレートな読み」([195/281])であると批判した。とはいえ彼女は、マーチャーは実のところゲイであると主張しているわけではない。セジウィックによれば、マーチャーは、「一つの『ホモセクシュアルな秘密』があると想像すること」の「クローゼットの内部にいる人間」([205/294]、強調セジウィック)であり、「密林の獣」の最後の場面は、マーチャーが「ホモセクシュアル・パニック」に陥った瞬間なのだ。つまり、マーチャーは、「男性の男性に対する欲望がどんなに中心的なものであるか——そしてその欲望の否認がどんなに中心的なものであるか——」に直面し、「エロティックな自己に関する無知を完全に体内化」([207/297])することによって、最終的に「ヘテ

ロセクシュアルな強制を体現し、それを強化する男になる」([210/301])のである。このようなセジウィックの読みに対して、例えば、デイヴィット・ヴァン・リア^⑩は、マーチャーが実際にゲイである可能性が排除されていると反論しているが、これらの読解は、マーチャーのセクシュアル・アイデンティティに関してそれぞれの立場から異なる見解を示しているものの、それはあくまでマーチャー自身の問題であり、その問題にメイがどのように関与するかということが明確に言及されることはないという点においては同様であると言える^⑪。

それゆえ、以上の議論とは枠組みを異にするものとして、マージョリー・ガーバー^⑫の議論が挙げられる。ガーバーは、セジウィックの議論が、二人の男性と一人の女性の三者関係のうち、男性同士の「ペア」の関係にとりわけ焦点をあてている点を批判的にふまえ、そのような男女の関係性を「スリーサム」として捉えることを提唱し、バイセクシュアリティに関する議論を展開している。本稿は、ガーバーの言うようなかたちで、セクシュアリティを三項の関係として捉えるものではない。しかし、セジウィックの議論をガーバーの議論へとつなげるための架け橋として、ジョン・マーチャーの物語とメイ・パートラムの物語とがどのように交錯しているのかに注目し、彼女の「密林の野獣」論が、実のところ、三項の関係をどのように抑

圧することで成立しているかを考察したいと思う。

四 ジョン・マーチャーの物語

セジウィックの読解において主題とされるジョン・マーチャーの物語において、最も注目すべきは、「密林の獣」の結末部分である。マーチャーはメイの墓前で、「ひとりの女性があるのままだに愛されたとき、その死がどのように悔やまれるか」ということを、見知らぬ中年男性の表情を目撃し、それに衝撃を受けることによって、「自分の経験としてではなく、人生の外側から」(200/201) 気づく。セジウィックに言わせれば、彼のこの気づきの瞬間は、「自身のホモセクシュアルな可能性を内包した、厄介で茫然とした自己についての無知から」(Sedgwick, 1990, [207/297]) 「その可能性の自己認識へと向かう進歩」ではなく、「完成され、合理化され、完全に隠蔽され受け入れられた自己についての無知へと向かう進歩」を遂げたマーチャーの、「エロティックな自己に関する無知を完全に体内化^{インコーポレーション}した瞬間」である。さらにセジウィックは、メイの墓前を舞台とした当該場面とそれに続く「密林の獣」最後の段落は、その形式において「対称的な補遺関係」にあること、そして最終段落の語りは、その前の場面に對して解答を与える

「クライマックスとなるような権威的な(権威主義的でさえある)リズム」があることを指摘し、その瞬間において「メイ・パートラムが不在のところ」での「ジェイムズとマーチャーの団結が提示される」([200/287]) としている。

ここでセジウィックの議論が何をどのように抑圧することで成立しているかについて考えてみる必要がある。まず「密林の獣」において注目すべきことは、真新しい墓を前にして悲しみにくれる男性の表情がマーチャーを魅了し、さらに「ひとりの女性があるのままだに愛されたとき、その死がどのように悔やまれるか」を知らしめる場面において、その男性が失った相手が女性であるという証拠はどこにも記されていないことである。それどころかマーチャーにとって、その男性の顔の印象があまりに強烈であったために、顔以外の彼の特徴(服装、年齢、性格、身分)には注目しなかったとされており、その男性が訪れた墓に刻まれた名(あるいは、より適切には、その名から類推されるその人物が女性であること)を、マーチャーが確認し得た可能性は極めて低いことが示唆されている。それにもかかわらず、マーチャーは、その男性が訪れた墓は女性の墓であると直観的に判断し、それによって遡及的にその男性が愛していたのは女性であったと断定する。それゆえマーチャーは、セジウィックの指摘する通り、見知らぬ男を「欲望する可能性から始める」

(Sedgwick, 1990, [211/302]) が、彼は「冒瀆の恐怖から」、「欲望を欲望に置き換え」、まさに「啓示的」([200/287])に見知らぬ男性の顔の表情にヘテロセクシュアルな「(くじかれた)欲望」([211/302])を投影し、それに「同一化」したと言えよう。さらに、ジェイムズ／語り手は、そのような同一化を遂げたマーチャーに対し、それに応答する形式でもって以下のような審判を下す。

「おそらく逃げ道は、彼女を愛することであつたのだ。そうしていれば、彼は人生を生きただろうに。彼女は生きた——今となっては彼女がどんな情熱を持っていたかは誰もわからないが——彼女は彼女をありのままに愛したのだから」(401)

したがって、「密林の獣」の最終場面で描かれているのは、マーチャーの「ホモセクシュアル・パニック」の瞬間であり、「メイ・バートラムが不在なところでの、二人の男、すなわち筆者／語り手とヒーローは、ついに、何を彼女が〈真に欲しがっていた〉か、何を彼女が〈真に必要としていた〉かについての、確信のこもった男性的知識を共有することによって再合同する」([200/287])というセジウィックの読解は的を射ている。しかしながら、以上のストーリーから、男性同士が女性を媒

介とすることで「社会的な」絆を強化し、かつそのような関係性から女性が排除されるという「ホモソーシャル」なプロットを見出し、そのようなホモソーシャリティ(とりわけ、そのミソジニー)をフェミニストの位置から批判するためには、その「確信のこもった男性的知識」を自らも「共有」する必要がある。なぜなら、仮にメイが自身をいわゆる異性愛女性であるとアイデンティファイしていなければ、彼女がホモソーシャルな絆における「女の交換」の「女」の位置にあることは、彼女にとって自身のセクシュアル・アイデンティティを隠すための口実として機能しているはずだからだ。したがって、もしその仮定が正しければ、彼女にとっても、マーチャーとの交際は異性愛の偽装でしかなく、それゆえ彼らの交際にミソジニーという意味を読み込むことは不適切であると言えるのではないだろうか。とすれば、セジウィックが、ホモソーシャリティにおけるミソジニーを真正面から批判することは避けつつも、「ジェイムズの小説においてジョン・マーチャーは、彼の人生に欲望が不在であることさえ知らず、メイ・バートラムが彼を欲望していることも、彼の鈍感さゆえに、彼女が死ぬまで知ることはない」([195/281-282]、強調引用者)と説明し、「今となっては彼女がどんな情熱を持っていたかは誰もわからない」にもかかわらず、メイ・バートラムは異性愛女性であるということを動

かしたい前提として、ここをここに明記すべきであろう。つまりセジウィックは、ホモソーシャリティがミソジニーであることを批判したいがために、「女性の交換」における「女」の位置に置かれた女性の、ヘテロセクシュアルではない欲望の可能性を予め排除しているのではないだろうか。その意味においてセジウィックの議論は、彼女自身が自らの議論について「異性愛の観点にだけ立って女性を分析していることは、それ自体ひどい欠陥である」(Sedgwick, 1985 [18/28]) と省察していることから明らかなように、女性のセクシュアル・アイデンティティにおけるヘテロノーマティヴィティに自身からめとられていることを不問に付すことでかろうじて成立し得るものであると言って差し支えないだろう。とはいえ筆者は、テレサ・デ・ローレティス⁵³と同様に、それゆえセジウィックの議論においてはレズビアン⁵⁴の欲望の問題が抹消されていると批判したいわけではなく、「女の交換」の「女」の位置にある女性のセクシュアリティの問題をとりわけ女性同性愛のそれに限定することなく考察するつもりである。

五 「真実」のセクシュアリティ／セクシュアリティの「真実」

さて、そもそもセジウィックの読みにおけるマーチャーの物語が、論理的整合性を保っているように思われるのは、マーチャーは「ホモセクシュアル・パニク」の危機にある男性⁵⁵であるという前提に依拠した場合のみである。つまり、そのような読解は、松下千雅子が『クィア物語論』⁵⁶で指摘したように、「マーチャーのセクシュアリティに関する仮説をもとに、それを前提とした読みを二重三重と重ねていくことによって、仮説自体を証明することがないままに、仮説を「真実」として捻出していくような、まさしくバフォーマティヴな読み」(松下、54)と言える。

松下は、セジウィックの読解について、「彼女のような読みが、(……)クローゼットの中と外との境界を浮かび上がらせることによってクローゼットを可視化し、クィア批評に大きく貢献してきた」と評価を与えながらも、「同時にそれは、ホモセクシュアリティを「存在するもの」として扱う態度からそれほど離れているわけではない」⁵⁷、「結局のところセクシュアリティをアウトする対象⁵⁸にしてしまっている」(54)と指摘している。というのもクローゼットとは、(とりわけ、規範的でない、あるいは禁止された)セクシュアリティのある個人の中に「存在するもの」と見なし、それについて知りたいという好奇心によって初めて可視化されうるものであるため、クローゼ

ットの中にいるとされる人物を、その中に隠しておくかあるいはその外に引っ張り出すかを決めるのは、クローゼットを可視化した側の人間にほかならない。それゆえ、クローゼットの中にいるとされる人物は、松下の指摘するように、「自分のセクシュアル・アイデンティティがうまく人から隠せているかどうか確かめることができない」(16) だけでなく、自らの意に反してクローゼットの外に引っ張り出される可能性や、あるいは反対に、その外へ出ようとしているにもかかわらず、その中に押し留められる可能性が往々にして存在するのである。このようにして、コミュニケーションの際にセクシュアリティが問題とされ、クローゼットが可視化される場合において、自らのセクシュアリティに関する「告白する者とそれを聞く者との間」(15) には権力関係が産出され、セクシュアル・アイデンティティはそのようなクローゼットを可視化する視線の権力によって決定されるため、「真実」のセクシュアル・アイデンティティ／セクシュアル・アイデンティティの「真実」は存在しないという松下の指摘は正しく、また有益である¹⁶⁾。

確かにセジウィックは、「ジェイムズはいつもではないにせよ、しばしばそのような偽装あるいは変換(ジェイムズの「人生で生きられたホモセクシュアルな欲望を、書かれたヘテロセクシュアルな欲望に」[……] 翻訳)すること)を試みたが、彼

の著作には変換しようと試みなかった材料と相当暴力的また粗雑にしかな変換できなかったような材料との両方が残余物として確かに残っている」と「私も信じている」(Sedgwick, 1990, [197/284] 括弧内及びその省略は引用者)と述べており、彼女が、ジェイムズのホモセクシュアルな欲望を、テクストに「確かに残っている」ものとしての「材料」あるいは「残余物」であると見なしているのは事実であるらしいことがわかる。とはいえ、セジウィックがそれを「材料」あるいは「残余物」と見なしていることを根拠にして、それを「アウトする対象にしてしまっている」と理解するのは過言であろう。なぜなら、セジウィックの読みでは、前章で述べたとおり、マーチャーは見知らぬ男の顔の表情に衝撃を受け、それに魅了されることによって自身の中にあるかもしれない同性愛の可能性に怯え、最終的には「ヘテロセクシュアルな強制を体現し、それを強化する男」として自身を確立させた、自分の欲望については完全に「無知」な人物であるとされているからである。つまりところセジウィックは、「密林の獣」にマーチャーのセクシュアル・アイデンティティ確立の失敗の物語を見出しているのであり、厳密には、マーチャーのセクシュアリティを「アウトする対象」とはしていないのだ。

では、このようなマーチャーのセクシュアル・アイデンティ

ティ確立の失敗の物語をどのように理解すべきであろうか。結論から先に述べれば、マーチャールのセクシュアル・アイデンティティの確立の引き金になっているのは、メイ・パートラムの欲望あるいは愛であり、「密林の獣」の読解において注意すべきことは、マーチャールのセクシュアル・アイデンティティの確立の（不）可能性は、女性という隠された第三項をもって成立していることである。次章においては、隠された第三項としての「女」が「男たち」の「ホモセクシュアル・パニック」の問題にどのように関与しているかを詳しく見ていきたい。

六 メイ・パートラムの物語

メイ・パートラムの物語は、「密林の獣」のテクスト内部においてはこれといって前景化されていない密やかな物語であると言ってしまうが、セジウィックは「私自身のエロスと経験」(Sedgwick, 1990, [209/300])を参照することによって、そこに「革命的な可能性」([199/286])を見出し、彼女の物語を前景化させた。それゆえメイの物語とは、ある意味スペクタクル化された物語であり、かつ実証不可能であると言える。なぜならセジウィックは、「自身のエロスと経験から語れば」([209/300])という前置きし、自らの「エロスと経験」を「知の対

象」として読者の前に差し出すことで、自身の理論に不思議な魅力をもたせ、かつ反論が不可能な領域に到達することに成功しているからだ。

さて、セジウィックがメイ・パートラムに同一化し、メイ／セジウィックに関する事柄として披露した読解によれば、彼女はおそらく「ホモセクシュアル・パニックの危機にある男性を嗅ぎ分ける最も繊細な嗅覚を持つだけでなく、そのような男性に対して最も魅力を感じる女性」([209/298])であり、「彼との関係が始まるのは、もともとは彼がホモセクシュアル・パニックにとらわれていると彼女が理解したから」である([206/296])。ただし、「彼のクローゼットに寄せる彼女の関心は、彼がそれを強化することを助けることには全くなく、それを消滅させること」([206/296])にあり、彼女は「それを消滅させること」によって、「彼がホモセクシュアルな可能性の周りに渦巻く自己についての無知を超えて、その可能性の自己認知へと向かう進歩」を遂げること、「ホモセクシュアル・パニック」の囚われから「自由になり、どのような種類にせよ、現れたセクシュアリティを見出し、楽しむこと」([207/297])を望んでいた。セジウィックは大胆にもそのような読解を提案し、以下のように論を展開する。

二人の関係から、彼のためではなく自分自身のために、彼女は何を欲しているのだろうか。そして、彼女が実際に手に入るのはいったい何なのか。よりはっきりと私自身のエロスと経験から語れば、男性のホモセクシュアル・パニックのマップピングがその感情の付近にいる女性に提供する、真実と権威との特別な関係が挙げられる。「……」彼女が彼に投資する配慮と創造性、また彼女自身が、彼がより誠実に知覚できるように立ち戻るためのルートとなることで、彼に潜むホモセクシュアルな可能性を育てようとする想像力に富む力量、それらはどちらも愛の形であるだけでなく、彼女の中にあるジェンダー・ポリティクスの弾力性の形である。それらはまた刺激の形であり、真実であるが不十分な権力の形であり、快樂の形でもあるのだ。(Epistemology of the Closet, 2009-210, 300-301)

ここでセジウィックが主張しているのは以下のことである。メイ・パートラムがジョン・マーチャーの「ホモセクシュアル・パニックのマップピング」を行ったのは(1)マーチャーが「ホモセクシュアルな可能性の周りに渦巻く自己についての無知を超えて、その可能性の自己認知へと向かう進歩」を遂げること、で、「ホモセクシュアル・パニック」から自由になり自身のセ

クシュアリティを「楽しむこと」を望んだためである。それゆえ、そのような行為は、マーチャーへの「愛の形」である。(2)彼女自身の希求する「真実と権威」を得るためであり、それゆえそれは、メイ・パートラム自身の「真実と権威」への欲望の形である。(3)したがって、当該行為は、「愛の形」でありかつ「真実と権威」への欲望の形なのである。

また、セジウィックの言うように、もしメイ・パートラムが「ホモセクシュアル・パニックの危機にある男性を嗅ぎ分ける最も繊細な嗅覚を持つだけでなく、そのような男性に対して最も魅力を感じる女性」であり、「彼との関係が始まるのは、もともととは彼がホモセクシュアル・パニックにとらわれていると彼女が理解したから」であるならば、「密林の獣」の主題である、マーチャーのセクシュアル・アイデンティティ確立の失敗の物語が、メイの欲望の充足あるいはその愛をその契機としているのは明らかである。とすれば、そこにおいて語られるマーチャーの物語とはメイによるマーチャーの物語であり、「ホモセクシュアル・パニックにとらわれた男性」と主題化されたマーチャーの物語とは、実のところメイの欲望／愛から読者の目を逸らす口実であると言えるかもしれない。

ここで、マーチャーとメイの「秘密」をめぐる会話を時系列的にみていくことによって、メイの誕生日に「彼女のほうから

もちだした方向転換」(388)以降、二人の関係が逆転し、それとともに会話の論点が決定的にずれていくことに注目したい。メイの誕生日までを前半、それ以降を後半とした場合、前半における二人の会話は二六の問答で構成されているが、そのうちの一九(約七三%)はメイが質問しマーチャーがそれに応答するものとなっており、残りの七(約二七%)はマーチャーが質問しメイがそれに応答するものとなっている。一方後半における会話は五九の問答で構成されているが、そのうち四五(約七六%)はマーチャーからメイへのそれ、残りの一三(約二四%)がメイからマーチャーへのそれである。つまり、前半においてはメイがマーチャーに対して告白を促す関係にあるのに対し、後半においてはその関係が逆転し、メイがマーチャーから告白を促されるようになるのである。

また、前半における「秘密」をめぐる会話の論点は、マーチャーの運命に関する彼自身の予感や確信、あるいはそれに対する彼自身の恐れの有無であるといえるが、「彼女の方から持ち出した方向転換」によってその論点はずらされる。前半と後半の分岐点となる、そのような「方向転換」が引き起こされたのは、以下のようなメイの台詞によってである。

「わたしたちの習慣のおかげですくなくともあなたの顔はつ

ぶさずにすんでいると思わない? だって、あなたは俗っぽい連中には、他の男たちと見わけがつかなくなっているのだから。普通、男性の最大の特徴はなんだと思う? あら、それは、つまらない女たちと際限なく時間を過ごせる能力よ。(……) わたしもあなたの教会であたえてくださいと祈る日々の糧の一部。なによりもこのことが、あなたの歩んでいる道を世間から隠しているのよ。」(369)

このメイの台詞に対してマーチャーはすかさず「君の方はなにが世間から隠しているのですか」(369)とやり返す。そしてそれ以降、彼らの会話の論点が「君を護っているものは何ですか」(374、強調ジェイムズ)という点に集約される。そして、長い月日を経てあらためて、「今となって、ぼくに起こりうる最悪のことはなんだと思いますか」(381、強調ジェイムズ)とマーチャーがメイに問うとき、その論点となっているのはマーチャーのまだ訪れぬ運命に対するメイの見解にほかならない。メイはその問いへの明言を避け、二人はありとあらゆる話題に対して向き合ってきたと主張するマーチャーに対して、「お互いのことも含めて?」とほほ笑んだあと、「まだ話してないこともあるわ」(382)と返答する。そして、メイは「わたしが決してお話ししなかったもの」が、かつて彼らが話題に挙げた

「あらゆる奇怪なことよりも」「ずっと奇怪な」、マーチャーが「最悪と呼ぶに十分に値するもの」(388)であろうと主張するのだ。ここでメイがほほえみつつほめかしているのは、未だ彼らの話題のなかにメイに関する事柄は上っておらず、メイを知ることあるいはメイという存在そのものが、マーチャーにとっては「最悪と呼ぶに十分に値する」「奇怪」なものであるということだと言えよう。したがって、会話の形式においても、またその内容においても、件の「方向転換」を分岐点として、「告白する者とそれを聞く者」の関係が逆転し、それに呼応し、あるいはそれを契機とするような形で、メイは自身の欲望を充足させるため／マーチャーを献身的に愛するため、マーチャーの「ホモセクシュアル・パニックのマッピング」を暴くべく／指し示し、彼を——おそらく失敗するであろうことを前提として——誘惑するのだ。

しかしながら、そのようなメイの欲望／愛は、当該小説の結末において、「彼女は生きた——今となっては彼女がどんな情熱を持っていたかは誰もわからないが——彼女は彼をありのままに愛したのだから」と語られ、マーチャーへの「ありのままの愛」として表象されることとなる。ここで重要なのは、この結末の語りに照らし合わせると、セジウィックの読みは齟齬をきたすということである。セジウィックは、厳密には、自身の

「エロスと経験」を投影したメイの欲望からその読解は成立するとしているが、それが「愛」であると同時に「真実と権威」への欲望であるとき、セジウィック／メイの読みは、「真実と権威」を通じて、単なる「愛」ではなく「真実」としての「ありのままの愛」として理解されることになるのだ。

この転換——政治的で、欲望に由来する読解が、「ありのままの愛」の「真実」の読解として歪曲されてしまうこと——こそが、セジウィックの議論のもっとも根本的な戦略である。そして、作品を丁寧に見ると、この転換、この戦略は、作品の中にも書きこまれており、それゆえ、セジウィックの議論は、単なる欲望として、あるいは、単なる真実として読まれるべきではない。つまり、彼女の議論は、欲望が「真実」へと変容するプロセスのパフォーマンスとして読まれなければならないのである。

この戦略がもたらすものは、「欲望」の投射が「真実」へと変換されることによってなされる、第三項としての「見る女」の権力、エージェンシーの抑圧である。それゆえ、ホモソーシャル／ホモセクシュアルの関係は、単なる「真実」の開示ではなく、第三項としての女の欲望の抑圧のプロセスとして読まなければならない。ホモソーシャルなものはホモソーシャルなれ自体として成り立っているのではなく、それと区別ができない

いホモセクシュアルなものを、区別ができないから抑圧するのだとセジウィックが指摘したとき、彼女は、「女の交換」を成立させるホモソーシャルな関係の抑圧性を指摘するという点で、フェミニストであった。しかし、同時にセジウィックの戦略は、それでもなお、女の（男性同性愛に対する）欲望を隠蔽する可能性を秘めている。あるいは、繰り返すが、セジウィック自身が自らの読解が自らの欲望の投射であることを認めているのだから、我々のなすべきことは、セジウィックのホモソーシャルリティについての議論、あるいは「ホモセクシュアル・パニックのマッピング」を「真実」の開示として受容することを止め、それが女の欲望を基盤として成立していることを確認しながら、それが、女性主体と男性同性愛の関係について、どのような理解の可能性を示すのかを考えていくことだろう。

七 結論

セジウィックの「密林の獣」読解のポイントは、(1)ジョン・マーチャーは「ホモセクシュアル・パニックの危機にある男性」であり、それゆえ「密林の獣」の主題は「ホモセクシュアル・パニック」であるとしたこと(2)男性の「ホモセクシュアル・パニック」はホモフォビアとミソジニーとをその特徴とし、

「ホモセクシュアル・パニック」にとらわれた男性は、(ヘテロノーマティブな父権社会においては)自身のセクシュアル・アイデンティティを確立することは不可能であることを例証したこと(3)フェミニスト的なアプローチから、メイ・パートラムに「真理と権威」への欲望を読み込み、それを前景化させたことの三点である。それゆえセジウィックの読解は、ヘテロノーマティブな父権社会に対する「アンチ・ホモフォビック」な批判となっており、かつ、「フェミニスト」的な読解の可能性を提起していることから、彼女は自身の目標を達成していると言える。

しかしながら、セジウィックは「アンチ・ホモフォビック」かつ「フェミニスト」の位置を固持するあまり、ジョン・マーチャーのセクシュアル・アイデンティティの確立の(不)可能性は、「女性」という第三項をもって成立していることに關して明確な言及を避けている。ここで再度明言すれば、マーチャーのセクシュアル・アイデンティティ確立の失敗の物語としての「密林の獣」の構造において、その真の欲望とはメイの欲望であり、そこにおいて主題とされたマーチャーの物語とは、真の欲望であるメイの欲望から我々の目を逸らす口実である。

また、メイの欲望とは、セジウィックが自らの欲望を投影し、それに同一化したものである。そして、そのことは、「密林の獣」においてはマーチャーへの「ありのままの愛」へと歪めら

れたメイの欲望／愛が、セジウィックの抱く幻想を反映したものであることの証左であり、それは裏を返せば、そのような幻想は現実においては決して充足されることのない願望であるということの証左でもある。

言い換えよう。セジウィックの抱いた「密林の獣」における幻想をその例証として筆者が主張したい仮説は、現実において、他者との間に権力関係を産出させることなく、その他者を愛するということは根本的に不可能であるということだ。なぜなら、我々は誰かを愛そうとした瞬間、望むと望まざるとに関わらず、彼／彼女の「真実」を希求する「知への意志」を帯びてしまい、その「真実」を「アウトする対象」とすることによって彼／彼女との間に権力関係を成立させてしまうことを免れないからである。「知への意志」に必然的に伴う権力関係、それはおそらく我々の想定するところの愛情関係とは相矛盾する実態を伴うものではないだろうか。がしかし、不幸にもというべきか、他者を愛するためには、彼／彼女の「真実」を知ることが不可

欠なのである。以上のようなジレンマは、セジウィックの論じる「ホモセクシュアル・パニック」を「マッピング」する、あるいは、ホモソーシャリティ／ホモセクシュアリティを認識する「女」にとっても当然逃れられない状況であり、それゆえそこに渦巻いているはずの権力／愛の微妙なバランス、つまり、「見る女」というエージェンシーを抑圧することでは、彼女の議論を成立させることはできない。

それゆえ、今日的な観点から重要なものは、男性同性愛の理解・把握が、フェミニストの理念とどのような関係を結び得るかであると言え、セジウィックは、この問題を考える上で好個の位置にいる。ホモソーシャリティ／ホモセクシュアリティをめぐる議論が、実のところ、そこで不可視化される第三項としての「女」につねに関連付けられていること、いわば、この議論が成立するために指定された「構成的外部」が、実のところ、「女」という知／権力の審級であったのだということを考えていかなければならないだろう。

- (1) Sedgwick, Eve Kosofsky. *Epistemology of the Closet*. 1990. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 2008. (イェ・コソフスキー・セグウィック『クローゼットの認識論——セクシエプリティの20世紀』外岡尚美訳、青土社、一九九九年) ページ数は「原著ペーシ数／日本語訳ペーシ数」。ただし、文脈に応じて、適宜拙訳を用いている。それについては以下の引用文献も同じ。
- (2) James, Henry. "The Beast in the Jungle." *The Complete Tales of Henry James 11 1900-1903*. 1903. Ed. Edel, Leon. London: Rupert Hart-Davis, 1964. 351-402. (「密林の野獣」北原妙子訳『ゲイ短編小説集』大橋洋一監訳、平凡社、一九九九年、一一三—一二〇五頁)
- (3) Sedgwick, *Between Men: English Literature and Male Homosexual Desire*. New York: Columbia UP, 1985. (イェ・コソフスキー・セグウィック『男同志の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、二〇〇一年)
- (4) クロード・レヴィ・ストロース『親族の基本構造 上・下』馬淵東一・田島節夫監訳、番町書房、一九七七年。Rubin, Gayle. "The Traffic in Women: Notes on the 'Political Economy' of Sex." *Toward an Anthology of Women*. Ed. Reiter, Rayna R. New York: Monthly Review Press, 1975: 157-210. (ナイル・ルービン「女たちによる交通——性の「政治経済学」について」のノート」長原豊訳『現代思想』二〇〇二年二月号、一一八—一二五頁)
- (5) ルネ・ジラル『欲望の現象学——文学の虚偽と真実』古田幸男訳、法政大学出版会、一九七一年。
- (6) 村山敏勝『（見えな）欲望へ向けて クリア批評との対話』人文書院、二〇〇五年、二四頁。
- (7) Butler, Judith. *Bodies that matter: On the Discursive Limits of 'Sex'*. New York: Routledge, 1993.
- (8) Bray, Alan. *Homosexuality in Renaissance England*. London: Gay Men's Press, 1982. (ブラン・ブレイ『同性愛の社会史——イギリス・ルネサンス』田口孝夫・山本雅男訳、一九九三年)
- (9) 『ゲイ短編小説集』大橋洋一監訳、平凡社、一九九九年、三七〇—三七四頁。
- (10) Van Leer, David. "The Best in the Closet: Homosexuality and the Pathology of Manhood." *Critical Inquiry* 15 (1989): 587-605.
- (11) ヴァン・リアの「セグウィックのいう、マーチャラーの「一つの〈ホモセクシュアルな秘密〉がある」と想像すること」のクローゼットは、「単にホモセクシュアルなそれに容易に還元される」という反論は「ゲイ・アイデンティティへのコミットになっているものの、彼の主張はセグウィック／メイを（ゲイの視点から）「フック・ハンズ」と見なすことによって強引に整合性を保っているかのように思われる。それに対して本論は「セグウィックの限界を見極め、彼女の知見をより開かれたセクシエアリティ理解につなげるものである」。
- (12) Garber, Marjorie. *Vice Versa: Bisexuality and the Eroticism of*

Everyday Life. 1995. Penguin books. 1997. 424-428.

- (13) de Lauretis, Teresa. *The Practice of Love: Lesbian Sexuality and Perverse Desire*. Bloomington & Indianapolis: Indiana UP, 1994.

- (14) 松下千雅子『クィア物語論 近代アメリカのクローゼット分析』人文書院、二〇〇九年。

- (15) 「アウトする」とは、松下の言葉にならば、「自身がホモセクシュアルであることがわからないようにゲイ／レズビアンが隠れている場所」であるクローゼットから、彼／彼女らを「引き張り出す」(3) ことである。

- (16) 松下の「密林の獣」論においては、自身の提起した「セクシュ

アリティの把握そのものが権力行為であることに意識的でなければならぬ」というテーゼを当てはめることによって、松下はメイ／解釈者の欲望が分かれるという仕組みになっているが、マーチャーの「恐れの本質は、セジュウィックが考えているようなホモフォビアではなく、自分の未来を自分自身で知りえない、という無知に対する恐れであると考えるべき」(76) としているために、メイに関しては「マーチャーの「秘密」を理解し、共有し、「恐れ」を緩和しようとしている」(77) とし、セジュウィックに関しては、「マーチャーの「秘密」をセクシュアリティに關することに集約しようという」(67) 意志があると言及するに留まっている。

(ひびの ゆか／修士課程)